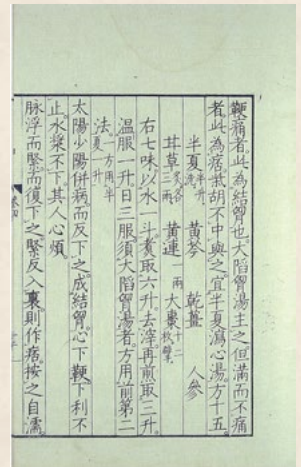




杏雨書屋(きょううしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。

其ノ参 傷寒論 —半夏瀉心湯—

案内人◇小曾戸 洋
(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究所 部長)



杏雨書屋蔵『本草図譜』(日本・1828年手写彩色) 杏雨書屋蔵『傷寒論』(日本・1856年刊)

『傷寒論』は中国後漢の末(3世紀)に張仲景が著したとされる急性熱性病の薬剂治療書です。漢方では西洋医学と違い、複数の生薬を巧みに調合した固有の処方を用いて病気に対処するのが原則です。『傷寒論』はその規範を示した聖典で古来、中国でも日本でも尊ばれ臨床応用されてきました。とくに『傷寒論』を信奉する日本の学派を古方派といいます。

『傷寒論』では漢方理論よりも実用的、臨床的な治療法が中心に記述されており、それまで中国各地にばらばらに存在していた優れた処方が分類、整理されます。葛根湯を初めとして、今日私たちが目にする多くの処方がすでにこの時代に成立しており、現在も使い続けられているのです。

主として胃部疾患を目標に汎用される半夏瀉心湯(ストレージタイプG)もまた『傷寒論』を出典とする重要な漢方処方です。『傷寒論』にはほかに大黃黄連瀉心湯・附子瀉心湯・生薑(姜)瀉心湯・甘草瀉心湯など、「瀉心」の語が付く処方が載っていますが、なかでも半夏瀉心湯は応用範囲が広く、頻用度の高い処方といえるでしょう。

「瀉心」とは「心を瀉する」ことで、この場合の「心」とは心臓そのものではなく、心下(みぞおち)の痞(つかえ・痞鞭・痞満)を指します。「瀉」とは液体状のものを体外に瀉(写)すということ。つまり胃部のつかえ・も

たれといった不快感に効果をあらわすことを示しているのです。

半夏瀉心湯を構成するのは、半夏・黄芩・乾薑・人参・黄連・大棗・甘草の7つの生薬ですが、処方名の示すとおり、その主役(主薬)は半夏でしょう。半夏は中国では紀元前3世紀以前から薬用に供されており、『神農本草経』には「傷寒寒熱、心下堅を治す。氣を下す。喉咽腫痛、頭眩・胸脹、欬逆、腸鳴。汗を止む」と記されています。

半夏の原植物はサトイモ科のカラスビシャクの塊茎。夏の半ばに採取するところからその名があるといえます。和名の「からすびしゃく」は鳥の柄杓のことで、花を包む葉の形が匙のようだから。またの名を「ほそくみ」「へほそ」といい、これは球型のなかに臍(ほそ)のようなくぼみがあることに由来しています。

半夏瀉心湯は1,700年間も使われ続けている良薬なのです。



小曾戸 洋(こそと ひろし)

1950年山口県下関で小曾戸薬局を営む小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書「小品方」の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解読により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。最近では宋版「孫真人玉函方(そんしんじんぎょくかんぼう)」を発見し話題に。主な著書「日本漢方典籍辞典」(大修館書店)、「中国医学古典と日本—書誌と伝承」(塙書房)、「漢方の歴史—中国・日本の伝統医学」(大修館書店あじあボックス)。